

The Weekly Butterfly's

昭和 51 年 6 月 7 日 第 3 種郵便物認可
毎月 2.12.22 日発行TSUISO
ツ-イ-ソ-No. 1461
2013 年 6 月 12 日

故川崎裕一氏のコレクションの行方

上田恭一郎

故川崎裕一氏は大分市出身、日本青年会議所九州協議会会長、大分市の佐伯建設の社長、会長を歴任され、建設業界で活躍されていたが、病のため 2010 年 11 月 7 日逝去された。氏は周知のようにパルナシウスコレクションに熱意を注がれ、雑誌「Wallace」の実質的スポンサーとして 9 巻まで発行、本業が多忙の中、新種、新亜種の記載も行われた。氏の遺言ではパルナシウスのコレクションはオランダのライデンにある国立自然史博物館に寄贈したいとあった。

もともと大分市は 1600 年オランダ船リーフデ号が遭難し、臼杵市に漂着した経緯からオランダと友好関係にあり、故川崎氏の弔問に来られた衆議院議員衛藤征士郎氏（大分オランダ協会会長）ご夫妻が間にたって、奥様はオランダ大使に会われ寄贈の意を伝えた。大使館のあっせんでライデン側も快諾、北大に留学中のオランダ人学生の方が整理、輸送時の標本保護作業を行った。この時アポロスバアゲハが多数あることで、「ワシントン条約の II に該当するので、日本からオランダに輸出時に問題がある」と指摘し作業を終えられた。その後オランダから輸送の委託を受けた国内の輸送業者がこの問題で困惑し、奥様から上田に相談があった。

最初の話は「アポロが 200 箱近くもあるので、輸送業者が困っている。」というものだった。川崎氏の遺言はパルナシウスコレクションをライデンが受けなかったら、北九州市立自然史・歴史博物館に寄贈したい、ということだった。ここで初めて大分のご自宅へ行き標本を拝見したが、アポロは 23 箱で 975 点であった。奥様は大分のご自宅を処分され東京へ帰られるということだったので、標本の処置を急がれていたのである。パル以外の標本は当館に寄贈いただくということになったので、ライデンにメールを入れ、担当の Dekker 博士と連絡をとった。アポロスバアゲハの輸出許可をとるのに時間がかかりそうなので、とりあえずそれ以外のパルを送付、アポロは当館に一時保管す

るということで3者とも合意し、標本を仕分けし移動したのが2012年の4月25日である。

その後ライデンまでの輸送を請け負った業者の人から電話があった。

業者の人：「まだアポロたくさんあるみたいなんですが？」

上田：「そこにラベルか何かついてますか？ あったらちょっと読んでみて欲しいんですが。」

業者の人：「ア・ポ・ロ・ニ・ウ・スとありますが、これはアポロじゃないんですか。」

上田：「はい大丈夫です。別の種類です。」

業者の人：「わかりました。安心しました。」

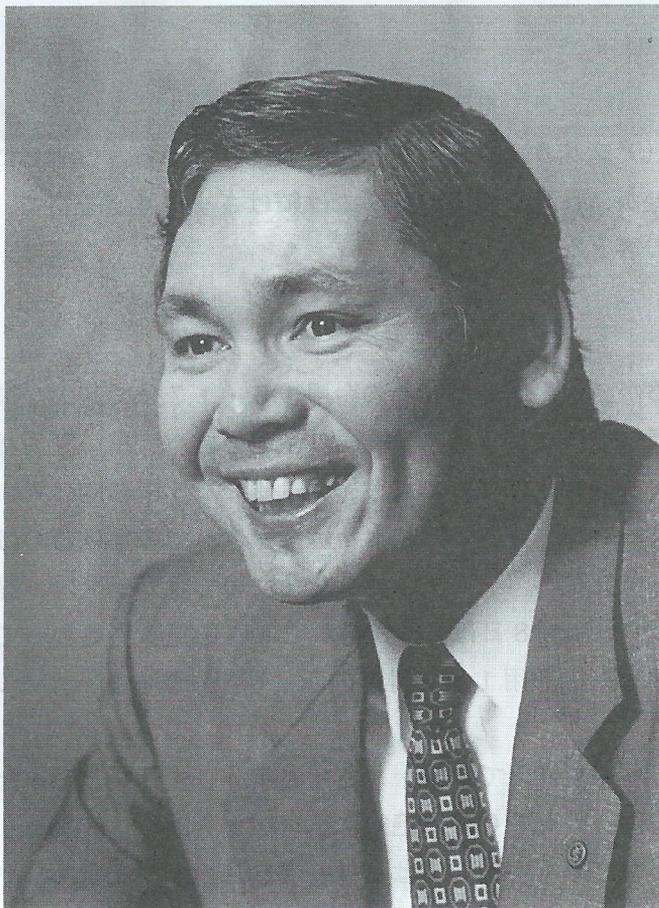
というやり取りなどがあり、2012年5月23日にアポロ以外のパルナシウスは仁川経由でオランダに無事出発した。この一件からも、業者の方々は現在ワシントン条約関連種類の取扱について非常に敏感になっていることが判る。

さて問題は残りのアポロの輸出許可である。日本からの再輸出になるので、通商産業省のホームページから書類をダウンロードし、書き始めたところ、国内に入ったとき原産地国が発行した CITES 書類が必要である事に気づいた。奥様にお聞きしたところ、探したけれども無いとのこと。Pelangi Butterflies の松田氏等はトリバネ輸入に際し原産地の輸出許可書をきちんととられている。またこの書類は輸入時に税関で回収されるがコピーは貰えるので、将来海外の博物館にワシントン条約関連種の寄贈を考えられている人は保存されることをお勧めしたい。担当者とお話したが、やはりこの書類がないと再輸出は認められないとのことであった。2012年の夏神奈川県立生命の星・地球博物館で行われた「大トンボ展」時に国際トンボ学会議があわせて行われ、ここに出席したライデンの Van Tol 博士から「書類の問題があったら手伝おうか？」という申し出があったが、上記のようにどうしようもないのでその旨お伝えした。さすがに粘り強く、「日本が条約加入前（1980年）の標本は無いのか？」と聞かれたが、たとえ古い標本であっても加入前に日本にはいったという証拠書類（輸入時の Invoice 等）が必要なのである。1984年中国大連で行った昆虫展で I のアレクサンドラアゲハを持って行き、かつまた帰ってくる時の書類手続きを思い出すといまでもため息がでる。

現在ライデンの国立自然史博物館では「Vlinders van Kawasaki」（川崎のチョウ）と

いうタイトルでこの寄贈標本を使った展示が行われている。オランダ語版のホームページ (<http://www.naturalis.nl/nl/>) でも掲載されている。残りの標本は北九州市立自然史・歴史博物館に寄贈され、今年の夏の「大昆虫展」(7月13日～9月1日まで)にて横地コレクション(一部)、森下コレクション、磯貝コレクション、岡野コレクション(書籍)等とあわせて展示される予定。

以上が故川崎裕一氏コレクションのこの間の経緯である。「TSUIISO」1459号を読むと根拠のない噂が飛び交っているようだが、これが実態(川崎裕二ではなく裕一)。一人の人が生涯かけて集めた標本を次世代に残して行くということは簡単なことでは無いが、アイスナーコレクションを目指した故川崎裕一氏の思いはなんとか形になったのではないだろうか。心からご冥福をお祈りしたい。



故川崎裕一氏(1953～2010)